

散歩する星

藤井颯太郎

劇作家・演出家・俳優

1995年生まれ、兵庫県立宝塚北高校演劇科在学中。『幻灯劇場』を旗揚げ、18歳の時に書いた戯曲『ミルとメコリ』でせんだい短期戯曲賞を最年少受賞。近年は、築地のホテルに宿泊しながら観劇する『泊まれる演劇』シリーズの演出を手掛けたり、NHK連続テレビ小説『おちよん』に出演したり、ABCテレビ『THE GREATEST SHOWMEN』で『A Star is Born』のドラマボクし音楽劇を発表するまで、多方面で頑張っている。

玄関の鍵をかけたかどうか、心配になってきた。愛犬チャムズと散歩を始め、まだ十分もたっていない。一度気になってしまったものはいくつかある。しぶしぶ、家へ引き返す。息子も散歩が好きで、しょっちゅう二人と一匹、散歩に出かけた。息子が散歩に誘ってくる時はいつも機嫌が悪い時だった。父親と衝突するたび息子は、父親を誘って散歩に出かけた。中学に上がり反抗期が来ると、ほぼ毎日機嫌が悪かったのだ。ほぼ毎日散歩に付き合わされることになった。不思議な子だった。

突然、街のいたるところでサイレンが鳴り響いた。続いて緊急避難を促す音声が続く。街頭のスピーカーに向かって吠え続けているチャムズを抱き抱えて、走り出す。こちら辺りに公共施設は少なく、避難できそうな場所は全くない。チャムズを抱える手が汗ばみ、震える。深く呼吸しながら空を見上げてみる。気持ちいいほどの晴天。風が涼しげに吹いて雲を押ししている。ちょうど、飛行機が一機飛んでいるのが見えた。もしこのまま落ちてしまったら、あの飛行機に掴まろう。と、出来もしないことを決意した。

「犬連れ！こっちに来い！」

振り返るとすぐ隣の家の窓から肉付きの良い腕が見えた。チャムズを抱きしめながら人生で一番早く走った。あと三メートル。街路樹の枝葉が威嚇する猫のように逆立ち始める。あと一メートル。スピーカーの裏側が滑り始めた。自分の体重が幼稚園児ほどになってしまった。肉付きの良い腕に掴まれ家に引き込まれた瞬間、私たちは勢いよく落下しはじめ、すぐに天井に叩きつけられた。私とチャムズは運よく男の身体に落下したが、男は運悪く、私とチャムズの下敷きになった。「間に合ってよかったな」肉付きの良い腕で引き起こしてくれたのは、特に腹周りの肉付きが良い男だった。

雨の日の窓際で外を眺めるように、チャムズは逆さまになった街を眺めていた。「こんなに大規模な落下があるなんてニュースではやってなかった。なんのための予報なんだ」地面に固定されている冷蔵庫に何度もジャンプを繰り返して、やつの思いでビールを取り出しながら男は言った。「本当に助かったよ。ありがと」「いいよいいよ、お互い様だから。助けたおかげで犬も撫でられる。犬アレルギーだけどね」男がブルタブを引くと、ビールの缶は気持ちの良い音を立てて吹き出した。慌てる男をよそにビールの泡はのんびりと、空の方へ落ちていった。彼は空に流れる雲を指さして言った。「あつちが俺が昨日こぼしたビールの泡だ」

私とチャムズはひっくり返った家の片付けを手伝い始めた。この星が散歩を始めてもう三年ほどになる。それ以前は太陽系なるものがあって、この星は規則正しく巨大な星の周りをぐるぐる回っていた。この星の上で生きているどんな生き物よりも長い歲月、地下鉄のダイヤより正確な時間で毎日回り続けていた。だがある日、従来の軌道から逸れはじめ、ほとんど予測できないほど不規則に動くようになってしまった。いつ他の星とぶつかるかわからないし、いつ重力が変化して、天地がひっくり返ってしまうのかわからないのだ。三年前、この星が初めて散歩した日。この星に住む多くの人が空へと落ちていった。だいぶ片付けが済んだ頃、チャムズが一足のスピーカーを啜ってきた。引き離そうにもなかなか引き離してくれないう。

「気に入ってもらえて嬉しいよ。それはうちの息子の足の匂いだよ。片方しか戻ってこなかったから大事にしてくれよ」
三本目のビールを開けようとしている男が言った。スピーカーの中をみると、シヨウタとカタカナで書かれていた。男のその声色で、私は全てを悟った。彼の横に座り、ビールを一本拝借し、飲む。「いくつだったんですか」「十歳」「うちの子は十五でした」それだけの会話で彼も全てを理解してくれた。

「うちの子がね、散歩はバランスを取り戻すための時間なんだってよく言っていました。だから我が家では親子喧嘩した日、必ず一緒に散歩に出かけるんです」

「珍しい子だなあ」

「反抗期真っ盛りでしたから、毎日散歩に出かけましたよ。散歩しているうちに、徐々に気持ちいいって、少しずつ話すようになって、バランスを取り戻したら、二人で家に戻るんです」

「賢い子だな」

「でもね、子供って一人立ちしちゃうんですね。ある日急に、一人で行動するからって言い出して、一人、散歩に出てっただんです。置いていかれました。三年前のことです」

遊び飽きたのかチャムズが窓際からこちらへやってきて、よだれまみれのスピーカーを返してくれた。

「いつも思うよ。あの子たちはちょっとでかけただけなんじゃないかって」
チャムズは男が気に入ったのか、男の手をべろべろ舐めまわしよだれまみれに始めた。途端、チャムズが宙に浮き始めた。男はチャムズを抱き抱え、私は男を抱き寄せた。緩やかに天地がひっくり返りはじめ、天井に置いていたビールは、地面に叩きつけられた我々の上に降り注いだ。

ビールまみれのまま私とチャムズが家に帰ると案の定、鍵はしまっていない。つまり、玄関のドアが全開になり、家中のものが表の道路に散乱していた。私とチャムズは今日二回目の片付けをしなければならなかった。息子の部屋のものもかなり道端に放り出されていた。今日が雨でなくて本当によかった。空を見上げると飛行機は随分遠くへ過ぎ去って、飛行機雲だけがわずかに、名残り惜しそうに残っていた。と、雲間から何か落ちてきて、チャムズと私の前に転がった。チャムズは嬉しそうに飛びかかり、その見覚えのあるスピーカーをよだれだらけにした。私は今度こそしっかりと玄関の鍵をかけ、しつぱを忙しなく揺らすチャムズとともに、再びあの男の家まで短い散歩を楽しむことにした。

